

# 揺れる戦死者慰霊・顕彰運動 —『忠霊塔物語』と能「忠霊」に着目して—

岡本 美憂

キーワード 戦死者慰霊・顕彰、祭祀の継続、靖国神社、能楽

## 1. はじめに

戦後75年以上を経た現在、首相の参拝などで靖国神社が話題になることがある一方、各地の公園等につく忠霊塔は、同じく戦死者の慰霊・顕彰に関わるものであるが、全国的な話題になることは殆ど無い。しかしながらこの忠霊塔は、戦時中、財団法人大日本忠霊顕彰会（以下「忠霊顕彰会」）という準政府的な規模の組織によって大々的に建設が進められたものであった。戦前から戦中にかけては忠霊塔の他にも靖国神社はもとより様々な慰霊・顕彰に関わる場が存在したが、忠霊塔はそれらの中でどのような立場にあり、また意義をもっていたのであろうか。

忠霊塔についてはこれまでも様々な研究がなされており、特に各地域の忠霊塔建設運動の経過に焦点を当てた研究が充実していると感じられる。本稿では、そうした地域の具体的な事例より少し離れ、忠霊塔建設運動の中で制作された2つの作品、すなわち忠霊顕彰会会長菱刈隆著『忠霊塔物語』（刊行1942年）と観世流新作能「忠霊」（初演1941年）を通して忠霊塔を中心とする戦死者の慰霊・顕彰運動について分析する。忠霊顕彰会は後述の通り忠霊顕彰の意義を広め忠霊塔の建設を促すべく様々な業界やメディアを巻き込んだ運動を行ったが、それらの中で忠霊塔がどのように表現されていたのかを知ることは戦中の忠霊塔の立場を知る上で意義があると考ええる。特に観世流新作能「忠霊」は、皇族や軍など当時の支配者層と繋がりがあり、また内容や歴史において幽霊や宗教と密接に関わる能楽の作品であるという点で、能楽のもつ特徴が忠霊塔の表現にどのように関わるのか注目される。

本稿では、まず先行研究等を参考に忠霊塔建設運動の概要を把握する（第2

章)。その上で『忠霊塔物語』における忠霊塔の意義等に関する記述を通して忠霊顕彰会の本来の主張に近いと考えられる忠霊塔像を明らかにする(第3章)。それらと比較して「忠霊」を分析することによって、より多様な関係者が関わる能楽という枠組みの中で忠霊塔がどのように表現されたのかを分析し(第4章)、最終的には戦中の戦死者慰霊・顕彰運動における忠霊塔の立場や意義について考察していきたい。

## 2. 忠霊塔建設運動の概要

そもそも本稿で扱う忠霊塔は、日露戦争終結後の南満州で郷里に還送されずに残った戦死者の遺灰を軍が集約して建てた納骨祠をその嚆矢とする(大原 1983b : 77)。これは、日清・日露戦争後に国内で盛んに建てられた忠魂碑と呼ばれる碑とは、遺灰が納められたという点で一線を画していた。

一方、国内における本格的な忠霊塔建設は、日中戦争開戦により戦死者が増加する中で陸軍の後援のもと行われた。中でも、1935年に福岡歩兵第24連隊に大隊長として赴任した桜井徳太郎という少佐が行った陸軍墓地の改修運動が、後の建設運動のモデルと言われている(大原 1983b : 80)。

この忠霊塔建設運動の担い手として1937年7月に発足したのが忠霊顕彰会である。陸軍大将菱刈隆を会長とし、名誉会長の内閣総理大臣平沼騏一郎のほか役員だけでもおよそ300名が名を連ねた同会は(菱刈 1939a)<sup>1</sup>、事業内容として戦地における忠霊塔建設の助成や維持・祭祀、内外地における建設の助成指導、その他の忠霊顕彰事業の3点を主なものとした(菱刈 1941a)<sup>2</sup>。こうした事業は新聞社をはじめとした各界を巻き込んで行われ、特に忠霊塔建設運動の立役者で会の事務取扱者にもなる桜井が発案したとされる「一日戦死運動」(一日戦死したつもりで一日分の収入の寄附を国民に求める運動)には仏教界がい

1 以降、「J A C A R Ref. B04012331200, 本邦記念物関係雑件／忠霊顕彰会関係 第一巻 (I -1-7-0-3.6\_001)」から引用並びに参考にした資料の筆者及び作成日は、本資料の「詳細情報」(国立公文書館アジア歴史センター)に基づく。

2 以降、「J A C A R Ref. B04012331300, 本邦記念物関係雑件／忠霊顕彰会関係 第一巻 (I -1-7-0-3.6\_001)」から引用並びに参考にした資料の筆者及び作成日は、本資料の「詳細情報」(国立公文書館アジア歴史センター)に基づく。

ち早く賛同したほか（大原 1983b：82）、歌舞伎や相撲の興行にも及んでいった（佐藤 2017：3）。

なお、戦中に建設された忠霊塔については1942年4月完成の大阪府和泉市「信太山忠霊塔」〈写真1〉を掲載したため参考までに参照願いたい。

こうして連日新聞を飾るほどに発展していった忠霊塔建設運動であったが、当時、神社界が創建運動を展開した護国神社との間で競合が危ぶまれ、忠霊塔の性格が改めて問題となっていた（横山 2008：99）。例えば、1939年9月1日付全国神職界機関紙『皇国時報』では、「忠死の英霊と、之を靖国神社並に其の分身たる各地護国神社の神として国家的祭祀が行はれると云ふ事とは、絶対不離の鉄則であると云はねばならぬ」として、祭祀の場が重複することへの強い危惧が表されている（大原 1983b：84-85）。このように神社界が忠霊塔建設運動に消極的な反応を示したことにはまた、この運動に積極的な態度を示した仏教界との対立も関係していた。1937年頃から神社界と仏教界との間で生じた戦死者の公葬の方式に関する論争（「忠霊（英霊）公葬問題」）が納まらぬ中（大原 1983b：90）、仏教になじみ深い遺骨を納める忠霊塔を推進する仏教界を神社界側が警戒する向きがあったのである<sup>3</sup>。

こうした忠霊塔を巡る問題を解消するため、1939年11月に神社関係中央部首脳と忠霊顕彰会幹部との間で懇談会が行われ、忠霊塔を「英霊の墳墓」として市町村が管理に当ることとし、祭祀様式についても参拝者の自由とすることが合意された（筆者不詳 1939：1）。この決定について神社界側は「英霊奉斎の神社と、忠霊塔との関係をも明瞭に意義づけるものであり国家的英霊奉祀と国民的忠霊顕彰の限界を明分ならしむるもの」と述べ（筆者不詳 1939：1）、国家的な祭祀は「英霊」の靈魂を祀る靖国神社・護国神社、国民レベルでの忠霊顕彰は公営の墳墓たる忠霊塔で行うものとした。満州の忠霊塔では戦死者の慰

---

3 「皇国時報」1939年9月1日には、「此の頃頻りに忠霊塔建設の議が新聞紙上に発表されるのを見て、これは多分仏教家が、仏教の立場を有利にするため、忠霊に結んで塔を建てて、忠霊を顕彰すると共に、仏教信仰の気運を醸成する一種の事業ではあるまいかと自分は直感した」と警戒感を示す新井無二郎（元慶応大講師）の発言が掲載されている（大原 1983b：85-86）。



〈写真1〉大阪府和泉市「信太山忠霊塔」（『朝日新聞』2020.6.24夕刊）

霊祭等が大々的に行われていたことと対照すると<sup>4</sup>、国内では神社界側に譲歩する形で祭祀の範囲が規定されたといえよう。なお、この合意では市町村等が行う公式祭祀様式に関しては決定が先送りされ（筆者不詳 1939：1）、例えば竣工式については、のち1942年2月に忠霊顕彰会が地方の風習等によって神仏どちらを採用してもかまわないと明言するに至る（菱刈 1941b：4）。

このように忠霊塔における儀式面で問題が残ったものの、忠霊塔は戦死者の遺骨の納まる公的な墳墓で、国家的祭祀の場ではないとして性格が確定され、靖国神社・護国神社との棲み分けがなされたのである。

### 3. 『忠霊塔物語』に見る忠霊塔建設運動

#### 3-1. 『忠霊塔物語』の概要

『忠霊塔物語』は1942年10月に童話春秋社より出版された。忠霊顕彰会会長の陸軍大将菱刈隆を筆者とし、内容についてはおおむね、忠霊塔と忠霊塔建設運動の起源の解説、内外地における運動の状況、忠霊塔の建設に関わる美談等を中心として、巻末には能「忠霊」の詞章も掲載されている。

4 「全満忠霊塔春季大祭 皇帝陛下御臨」（『朝日新聞』1943.5.31朝刊）、「全満忠霊塔、秋季例祭」（『朝日新聞』1943.9.19夕刊）等の記事が見られる。

本書刊行の趣旨に関係して菱刈は、「平生の所感を陳べ、重ねて同胞諸君の扶翼援助を冀ふ次第であります」と述べており（1942 a : 6）、かねてより事業の趣旨の普及が不十分であると感じていた忠霊顕彰会が（菱刈 1941 c : 63）、本書を通して改めて忠霊塔建設の趣旨と必要性を訴え、建設や寄附の促進を図ろうとしたことが分かる。

以下、本章では菱刈が本書を通して主張していることの中でも、忠霊塔や忠霊塔建設運動の意義や必要性に関わるものと、神社界との間で問題になった忠霊塔の性格に関わるものの2点に注目して分析していく。なお、発表順としては『忠霊塔物語』の方が「忠霊」よりも約1年遅いが、会長の菱刈に代表される忠霊顕彰会の主張を「忠霊」分析の土台とするため、先に『忠霊塔物語』の分析をすることをことわっておきたい。

### 3-2. 忠霊塔建設の意義——忠霊塔と祭祀

第2章で日清・日露戦争や日中戦争を機に忠霊塔を求める動きが生じたと述べたが、『忠霊塔物語』において菱刈は忠霊塔を建てる意義についてどのように語っているのか。まずこの点を端的に表しているものとして、本書「緒書」で忠霊顕彰会発足の理由を次のように述べている（菱刈 1942 a : 4-5）。

私共一億同胞は、誓つて戦歿将士の精神を無にする事なく、国運の進展を庶幾すると共に、忠霊が現世に遺されたる形見を崇めて忠霊塔を築き、一は以て祭祀を忘れず国土の繁栄を希ひ、一は以て子孫の鑑戒たらしめ、其の鴻業を無窮に伝へて万代不滅の光輝を増さねばなりません。（下線筆者）

ここでは、忠霊塔を建てる目的として、①忠霊に対する祭祀を忘れないこと、②忠霊の偉業を伝え子孫の手本とすること、の2つが挙げられている。

まず①の目的は、国内で忠霊塔建設運動が生じた理由、すなわち、軍人墓の荒廃を防ぎ祭祀を続けることの重要性を指摘したものと考えられる。本書では建設運動のモデルとなる陸軍墓地の整備を行った桜井徳太郎の談として、1936

年3月5日時点で福岡市内145ヶ寺を調査した結果、日清・日露戦争の戦死者遺族のうち約8割が没落、或は移転して墓参が絶え、無縁塔に納められたり墓石が行方不明になったりしていたことが明かされている（菱刈 1942 a : 33）。桜井はこうした現状を改善すべく、市町村毎に一基ずつの忠霊塔を建て、名誉墓地として永久に祭祀を続けることを志した（菱刈 1942 a : 34）。これが忠霊顕彰会の創設に結びついたということである。

さらに、この忠霊塔を建て祭祀を続けるということは、単に戦死者を悼んでの行為に留まらず、国民を戦争へ動員することに繋がるものであった。これは②の目的に表されている。実際、忠霊顕彰会常任理事の島内松秀の談として、1941年7月2日付『大阪毎日新聞』に「遺族らも『あんな立派な墓に納め皆さんが詣つてくれるとあらば何人子どもが死んでもいい』といふようなことを誰もがいつてゐた」という報告もあり（今井 2008 : 389）、忠霊塔が名誉の顕彰を通して兵士を再生産する役割を担うものであったことが窺える。

なお、こうした戦争意識の醸成は忠霊塔への勤労奉仕や参拝の他、地域の行事を忠霊塔前で行うことによって成されると意識されていた。菱刈(1942 a : 205)は、忠霊塔既設地域のうち「精神作興に重大な役割」を果たしつつある地域の特徴として、地域の儀式や催しに際して必ず忠霊塔前に集合して国民儀礼を行うことを指摘した上で、忠霊塔が「団結の精神力を向ける具体的な対象物」となっていると評価している。神社界との合意において国家的な祭祀の場ではない墓とされた忠霊塔ではあったが、単に個人が参拝するものではなく、公的な儀式を行う場としても重視されていたのである。

### 3-3. 忠霊塔の性格——他の慰霊・顕彰施設との棲み分け

忠霊塔が靖国神社・護国神社と競合するおそれがあった中でその性格が問題となったことは先に述べたが、『忠霊塔物語』においても神社や他の記念碑、個人墓との間で棲み分けをしようとしたことが窺える。

まず忠霊塔と靖国神社・護国神社、さらに他の碑との関係について見ると、神社界との合意で確定された墓としての性格、具体的には遺骨等を納めること

が特に重視されていた。神社との区別について菱刈（1942 a : 16-17）は、靖国神社・護国神社を「忠霊の永遠無窮に宿り給ふところ」とする一方で、忠霊塔を「忠霊の御姿（遺骨、遺髪等）を安置して、幾久しくお祀り申し上げ」ところと述べ、靈魂を祀る場として靖国神社・護国神社を尊重した上で、忠霊塔をその遺骨等を安置する場として棲み分けを行っている。さらに菱刈（1942 a : 256）は、忠霊塔と靖国神社それぞれに詣でた際に抱く思いとして、前者では遺骨の前で話してみたいというような人間的懐かし味が湧く一方、後者では懐かしさよりも「特別の対神様の威」が生じると述べ、精神的に死者に身近な場として忠霊塔を捉えている。この点、本文中で対照しているのは靖国神社であるが、府県毎に創建された護国神社との関係においてみると、より意味をなしてくると考えられる。つまり、地域単位の身近な慰霊・顕彰の場という点で忠霊塔と護国神社とは類似するが、遺骨を故人を偲ぶ縁と捉えれば、納骨が伴う忠霊塔は物理的な距離にとどまらない死者に対する親しみを感じられる場として意義を見出すことができる。なお、これは遺骨の納められていない碑との関係でも同様のことが言えるが、『忠霊塔物語』の記述をみると、神社のように靈魂のありかとして尊重されていない分、忠霊塔の優位性がより強調される結果となっていた<sup>5</sup>。

続いて個人墓と忠霊塔の関係に関する記述に移りたい。公営の墓とされた忠霊塔はその経緯をたどれば家単位で管理されていた軍人墓の荒廃から求められたものであったことは先に述べた。『忠霊塔物語』で菱刈（1942 a : 182-185）はこの点を踏まえて個人墓を新たに造る必要はないといい、市町村民たちが共同の責任として忠霊塔を守る必要性を訴えている。そもそも個人墓に対して陸軍は以前から抑制的な見解を示していたが<sup>6</sup>、本書においても個人墓を建

---

5 例えば、忠霊塔の前に額いた時は「何ともいふことの出来ない親しみ深い、なつかしい思ひ出の威に浸る」とした上で、遺骨のないただの記念碑では「誰しもさうまでに、深い感銘に打たれることはありますまい」と述べられている（菱刈 1942 a : 63）。

6 陸軍省は1939年2月27日陸普第1110号陸軍省副官通牒「志那事変ニ関スル碑表建設ノ件」の中で次のような見解を示している（大原 1983 b : 75）。

個人墓地ニ対シテハ軍ノ干与スルトコロニアラサルモ其ノ遺家族等ニ於テ身分不相応ナル墓

設しようとした遺族に対し村長が控えるように言ったという事例が肯定的に紹介されており（菱刈 1942 a : 160）、個人墓の機能を忠霊塔に吸収させて戦死者の慰霊・顕彰を行う「墓」をできる限り一本化させようとしていたことが分かる。

以上、忠霊塔と他の戦死者の慰霊・顕彰に関わる場との関係に関する記述を通して忠霊塔の性格について考えてきた。その中で特に強調されていたのは遺骨を納めるという特徴であり、神社界側は国家的な祭祀の場ではない墓という程度に捉えていたものを、菱刈は戦死者を懐かしく、親しい存在として感じる上で重要なものと主張していた。また、個人墓との関係においては、市町村単位の公的な墓として住民が管理することで、墓の荒廃を防ぎ戦死者祭祀を継続していくことが強調されていた。

## 4. 能「忠霊」に見る忠霊塔建設運動

### 4-1. 能「忠霊」の概要

これまで、先行研究や『忠霊塔物語』をもとに神社界や菱刈を代表する忠霊顕彰会の忠霊塔に関する見解をそれぞれ述べてきた。そこからは、遺族等との心情的な関係においては個人性が強調されつつも、その維持や祭祀は公的に行われるものであり、しかしあくまでも「国家的英霊奉祀」の場ではないという微妙な位置取りの中で存在していた忠霊塔の姿が見えてくる。本章ではそれを踏まえつつ、忠霊顕彰会の依頼で制作された能「忠霊」の分析を行っていく。本作は、1941年の春に三室戸敬光子爵を通じて当時観世宗家の後見人であった観世鍔之丞らに依頼された後、大槻十三、坂井音次郎、武田太加志、浅見眞健の4名からなる観世会委員会により制作された。委員の中でも浅見眞健の作が採用された本作は、大まかには戦死者の霊である忠霊をシテとし、忠霊塔前を舞台とする前半部と靖国神社を舞台とする後半部、そして前半と後半を繋ぐ間狂言からなる夢幻能となっている。

---

碑ヲ建設スル等ノコト無ク戦歿者ノ葬ニ依ル永久ノ名誉顕彰ハ忠霊塔及陸軍墓地合葬等ニ依ル如ク指導スルコト



ここではまず具体的な内容に入る前に、依頼から発表までの経緯をたどっていきたい。そもそも忠霊顕彰会は、「忠霊」発表以前にも歌舞伎や相撲等も参与した「一日戦死運動」を行い、また紙芝居の制作や映画鑑賞会を通して児童に忠霊顕彰の思想を普及させる活動も行っていた<sup>7</sup>。一方「忠霊」以前の能楽界の動きを見るに、当時の朝日新聞や毎日新聞の記事からはこの「一日戦死運動」に参加していた記録は見られず、能楽自体も国民に忠霊顕彰会の活動を喧伝するメディアとして未だ広く大衆が触れられるものではなかった。昭和初期には一部の富裕層だけでなく、公務員や会社員など高い教育レベルを持ち、会社のサークルなどで能や謡曲に触れる人が増えてきていたものの（飯塚 2007：21）、能楽専用舞台以外での上演を禁止する能楽会（昭和13年に能楽協会より改称）における原則などにより、多くの人が気軽に見に行けるものでは未だ無かったのである（佐藤 2017：4）。なお、観世流は1942年7月に行われた後樂園スタジアムにおける「忠霊」の上演に際してこの上演場所に関する原則を撤廃しており（佐藤 2017：4）、戦前から戦中にかけて、能楽はちょうど大衆化の過渡期にあったといえる。

このような状況であった能楽に忠霊顕彰会が新作の依頼をすることになったきっかけには城戸久平という彫刻家の存在があった。当時の新聞記事によれば、能面を打って生計を立てていた城戸は、同郷の桜井徳太郎の影響を受けて運動に参加し、1939年頃から忠霊面の製作を志し始めた。その過程で国体精神を聞くために三室戸敬光子爵を訪ね、そのうち会長の菱刈もそのひたむきな一念に打たれて忠霊を主題とする能を新作することになったという。（『朝日新聞』1941.10.4朝刊）城戸が戦後に語ったところによれば、「伝統的な型通りの能面の中に、なんとかして忠霊をいかせぬものか」と考えて忠霊面の製作を始めたといい（1964：124）、能「忠霊」についても「古典芸術の形式に新しい生命を

---

7 映画に関しては1940年3月15日に関係者との懇談会を開き（菱刈 1939c：26）、同年8月頃から東京を中心とする各地の小学校で「防空並忠霊顕彰映画及講演」を行った記録が見られる（菱刈 1941d：67）。また紙芝居は同年4月11日の懇談会で協力を求めた後（菱刈 1941d：64）、翌5月18日から22日にかけて日本画劇協会主催の『忠霊顕彰紙芝居大会』が浅草観音裏の広場で開催され、忠霊顕彰会の依頼で制作されたとみられる4作品が披露された（『朝日新聞』1940.5.14夕刊）。

吹き込み、前人未到の形式の創造をしようという、芸術の分野における最も困難な仕事」と評価するなど、古典や伝統を現代と繋げる芸術的試みとして捉えていたようである（城戸 1964：124）。

ところで、城戸の相談に乗っていたという三室戸敬光子爵は1935年の天皇機関説問題で美濃部達吉批判の強硬派の立場をとり、1939年には貴族院議員を経験している人物であるが（日外アソシエーツ 2004：2444）、彼は謡を嗜み昭和天皇の即位式で観世流による能を催すべく尽力するなど観世流と浅からぬ関係であった（三室戸 1940：7－8）。こうした繋がりから能楽界の中でも特に観世流に白羽の矢が立ったことが推察される。

以上の経緯からは、城戸久平と三室戸敬光子爵という能楽と忠霊顕彰運動の橋渡しとなる人物の存在が新作能制作に大きな役割を果たしていたことが窺える。では、新作能制作について当の忠霊顕彰会はどのように考えていたのか。会長の菱刈は「忠霊」制作の目的について次のように述べている。

そも――本会がこの「忠霊」能を取り上げましたのは、この我国固有の古典芸術を通じて、聖戦の華と散つた護国の忠霊に対して感謝を捧げ、これを慰めると共に忠霊の遺家族をも慰め感謝を贈り、且つ又戦線銃後の国民を鼓舞し激励する目的であります（菱刈 1942b：20）

菱刈の発言を整理すれば、「忠霊」制作の目的として、①忠霊に対して感謝を捧げこれを慰める、②遺家族をも慰め感謝を贈る、③国民を鼓舞し激励する、という3点が挙げられる。この中でも特に能楽に特色的といえるのは菱刈がはじめに挙げた①の目的であると考えられる。能には死者の幽霊が現れ、それが経文読誦の力によって成仏するという夢幻能と呼ばれる形式があり、「忠霊」もそれに該当するが、これは戦死者の慰霊を自然に組み込みやすい形式と言える。また能楽は神に奉納するものでもあった点で、戦死者であり靖国神社に祀られる神でもあった霊を扱うのに好都合であったと考えられる。実際、靖国神社においては1877年11月、前身の招魂社であった時の臨時招魂大祭で能が行わ

れて以降、靖国神社での奉納は恒例行事として続いていた（宮本編 2017：315）。

このように能楽は、霊を主題とする作品を提供する土台があり、戦死者に対する慰霊を表現するにあたって靖国神社の顔を立てやすいという点で、忠霊顕彰会にとっても都合の良いものであったと推察される。

こうして忠霊面からはじまり忠霊を主題とする作品という前提で依頼された新作能であったが、「忠霊」作者の浅見真健の子息、浅見真高の談によれば、観世会委員会が当初候補として挙げたのは高浜虚子作の「義経」であった（田中 1990:33）。源頼朝に迫われて大陸に渡りジンギスカンとなった義経の霊（シテ）と僧侶（ワキ）が登場するこの夢幻能は、結局、忠霊顕彰会の要望には不適当ということになる。おそらくこうした経緯を踏まえて改めて議論が重ねられたのであろう、三室戸敬光子爵は新作能制作にあたって以下の方針がたてられたことを明かしている（三室戸 1942：34）。

- 一、謡曲本の枚数を十枚限度とする事
- 二、僧脇を用ゐざる事
- 三、登場人物を固定せざる事
- 四、所、時についても同様である事
- 五、謡の程度を中位となす事

夢幻能では、諸国一見の僧（ワキ）が特定の地に赴き、そこで当地に縁のある特定の人物の霊（シテ）と出会うという流れが一般的であるが、方針二、三、四からは、「義経」はもとより従来の夢幻能の一般的な形式から離れ、忠霊という主題に合わせた作品を志したことが分かる。この点、城戸久平が評したように古典芸術の形式に新しい生命を吹き込む作品としての側面も見える。

このように曲折を経ながら制作された「忠霊」は1941年11月11日に靖国神社の能舞台で初演を迎えた。その後は北海道から九州に至る多くの都市で上演され、その合計回数は100回以上にのぼる（佐藤 2017：1）。また文楽や宝塚な

どの他の演劇で「忠霊」の内容を踏襲する作品が上演される動きもあり（富山 2021:44-50）、同時代の新作能の中でも群を抜いて広く享受された作品となった。

#### 4-2. 構成と曲目分類

ここからは本作の具体的な内容を通して忠霊やそれに対する慰霊・顕彰がどのように描かれているかを分析していく。

まず本作の梗概は以下の通りである。なお、この梗概並びに今後引用する「忠霊」のテキストは田中充編『未刊謡曲集 続九』をもとにしていることを始めにことわっておく。

＊

国土何某（ワキ）は戦時下の国民教化の旅の途中、忠霊塔にたどり着き、そこで礼拝をすることにした。〔①〕するとそこに、親子と思しき老人（前シテ）〈写真2〉と男（前ツレ）が登場し、〔②〕忠霊を称えて熱心に勤労奉仕に励む姿を見せる。忠霊の心境を語る老人〔③・④〕を不思議に思った国土何某が“あなたは何者か”と問いかけると、老人は自身が忠霊であることを仄めかして靖国神社の社頭へと姿を消してしまう〔⑤〕。【中入り】

【間狂言】<sup>8</sup>〔⑥〕

明け方、〔⑦〕壮年の忠霊の姿で靖国神社に姿を現した先の老人（後シテ）〈写真3〉は、〔⑧〕死闘の末に戦死し、護国の神となるまでを再現して見せる。〔⑨〕その後、護国の神に姿も変じた忠霊は、〔⑩〕神慮を鎮める舞を舞い【神舞】、〔⑪・⑫〕国の繁栄を讃える。〔⑬〕

（〔①〕～〔⑬〕は後掲〈表1〉を参照のこと。）

＊

---

8 「忠霊」の間狂言は和泉流と大蔵流で2種類制作されている。和泉流の間狂言が馬の精が登場して軍馬の徳を称えるという内容であるのに対し、大蔵流では能の主人公である神体に対して、その従属神〈末社の神〉が主人公として登場する末社間の形式で、靖国神社と忠霊塔の謂われが語られる（茂山 2018:5）。



〈写真2〉「忠霊」前シテ・老人（筆者不詳 1942b : 18）



〈写真3〉「忠霊」後シテ・忠霊（筆者不詳 1942b : 18）

能には曲の内容やシテの性質から分類する五番立てという分類がある<sup>9</sup>。「忠

9 五番立ての内容は次の通り。

初番目物（脇能。神能）…神の出現する祝福をテーマとした能。

二番目物（修羅物）…主として死後修羅道におちた源平の武将の幽霊をシテとする能。

三番目物（鬘物）…優美な女性、老女、草木の精などをシテとする能。

四番目物（雑物）…他の四類に属さない種々雑多な傾向の能の一群。

五番目物（切能。鬼畜物）…鬼、畜類、天狗、竜神などの活躍するテンポの速い能。（小

「霊」がその分類のうちどれにあたるかということについて能楽師の梅若万三郎（1944：28）は「本曲は脇能にもなり、二番目物でもあり、四五番目物でもありいたします」としてその分類範囲を非常に広く取っている。しかし当時の感想や批評文に「高砂と屋島を一つにしたもの」（大河内 1942:25）とあるように、特に、「高砂」と「屋島」がそれぞれ分類される初番目物と二番目物の要素を強く持っている。参考までに「忠霊」と「高砂」・「屋島」の展開を比較したもの（表1）にまとめた。それを見ると、特に中入り後の展開において戦いの有様を見せる二番目物の見せ場と、神をシテとする初番目物の祝言的な部分が複合されていることが分かる。シテが持つ扇も⑧⑨では勝修羅扇であるが物着以降は神扇に持ち変えるという工夫がなされており、戦死者が神となるという観念が表現されている。ただし二番目物では、修羅道におちたシテがその様子と苦しみをワキ（多くは僧）に見せて供養を請うという展開をたどるのに対し

〈表1〉「忠霊」と「高砂」及び「屋島」の展開比較（筆者作成）<sup>10</sup>

|   | 「忠霊」の展開  | 高砂 | 屋島 |
|---|--|----|----|
| ① | ワキ・ワキツレの登場   | ○  | ○  |
| ② | シテ・シテツレの登場   | ○  | ○  |
| ③ | ワキを質問者とするワキ・シテ間の交渉                                       | ○  | ○  |
| ④ | シテ謡と地謡を交えつつシテの言葉が語られる                                    | ○  | ○  |
| ⑤ | 地謡とシテの掛け合いを通してシテの正体が明かされた後、シテが姿を消す【中入】                   | ○  | ○  |
| ⑥ | 【間狂言】  | ○  | ○  |
| ⑦ | ワキの待謡で朝の訪れが告げられる<br>（「高砂」ではワキの移動、「屋島」ではワキが夢を見ていることが表される） | ○  | ○  |
| ⑧ | 後シテの登場   | ○  | ○  |
| ⑨ | シテが生前の戦いの様子を再現する   | －  | ○  |
| ⑩ | 【物着】   | －  | －  |
| ⑪ | シテの一声・地謡   | －  | ○  |
| ⑫ | 【神舞】（＊「屋島」ではカケリを舞う）                                      | ○  | －* |
| ⑬ | シテによる御代の祝福   | ○  | －  |

て、修羅道はもとより戦死から神への移行時に供養の要素も登場しない本作は、戦死に対して否定的な印象を抱かせかねず、さらに仏教の思想に基づくような要素は除かれている点で特徴的である。以上より、「忠霊」では初番目物と二番目物を中心に従来の能の要素を取捨選択しながら組み合わせることで、戦死者を靖国神社の神とする思想がその構成の上で強調されていることが分かる。

#### 4-3. シテ・忠霊の表現

本作のシテである忠霊は、構成面の工夫によって武士（兵士）と神の両方の性質を併せ持つ存在であることは先に述べた。しかし本作のシテについては他にも特徴的な点がある。すなわちシテが特定の人物でなく、前シテが老人で後シテが忠霊となっていることである。これは4-1で引用した「忠霊」制作方針の一つである登場人物を固定しないことに基づくもので、特定の人物の行跡が語られることが多い他作品と一線を画している。この方針がとられた理由については1941年11月付『観世』における観世鏡之丞の次の言葉から理解できると思われる。

まづ作詞の精神が、国難に殉じた忠霊を崇敬し且つ弔ひ慰めるにありますから、その趣意が文辞の上に明らかにされてゐなければなりません。ある特定の人物を捉へて来て、その行蹟とか思想とかを通して精神を昂揚するといふ間接的な表現よりも作の表面に忠霊の精神といったものが、厳然と現れてゐなくてはなりません（観世 1941：2）

「忠霊」の前に候補に挙がった「義経」が不採用とされた経緯は前述したが、過去特定の人物のシテでは現代の戦死者とずれが生じ、当時の国民が普遍的に共感できる物語にはならないと考えられたことが分かる。

---

10 「高砂」の展開は『解註 謡曲全集 巻一』（野上編 1982a：85-98）、「屋島」は『解註 謡曲全集 巻二』（野上編 1982b：26-42）を参考に作成した。なお、展開が共通している部分は「○」、共通していない部分は「-」を付している。

ところで、本作における普遍的な戦死者像は忠霊塔から連想される戦死者像というよりは靖国神社の祭神としてのそれに近いものであると考えられる。『忠霊塔物語』で見たように、忠霊塔は戦死者の遺骨等を縁として生前の姿が思い起こされるというような個別的で懐かしみのある故人との関係が強調されていた。一方、靖国神社の祭神は祭神の名簿を社殿に祀るという点で個人性を持ちつつも、天皇のために命を落とした「英霊」を生前の位階や功績に関わらず同格に祀る集団性の強いものであった（村上 1976:112）。この点「忠霊」は、「国家の難に赴いて戦死した多くの将兵の忠魂――何々大将とか何々上等兵でなしに、無数の魂の集合体をシテとして人格化してゐる」（筆者不詳 1942 a : 78）という朝日新聞社記者の栗林貞一の感想からも見られるように、靖国神社の祭神の集団的な死者観にかなり近いシテ像となっているといえる。

次に、本作のシテ像を考えるに当たってより具体的な詞章の記述に注目すると、中でも忠霊塔前で展開される前半と靖国神社で展開される後半を繋ぐロングの場面からは、忠霊塔と靖国神社の関係が垣間見えると考えられる。

地：不思議なりとよ靖国の。神の御心木綿幣の。御身いかなる人やらん、  
〈何故靖国の神の心を言う（示す）ことができるのであろうか。あなたは一体誰なのか〉

シテ：人か神かは白真弓。絃をはなれて飛ぶ空の。弥猛の心靖国の、  
〈人か神かは問わずその心はどこにいても絃を離れて矢のように靖国に向かう〉

地：神の、社頭に立ち越え、夜もすがら語り申さんと。云ふかと見れば忠霊の。塔の辺に幻か。夢の、如くになりけり。夢の如くになりけり。

（〈〉に東谷櫻子（2018：17）による現代語訳を挿入した）

この場面は、この前に登場するワキ（国士何某）の、「花と散りにし忠霊の。御心如何におはすらん」という問いに前シテ（老人）が答えたことを不審に思っ



たワキがその正体を尋ねるという場面である。

ここでシテ謡の2行目に注目すると、まず「人か神かは白真弓」という言葉からはシテを人と神どちらにも限定しないことで、そのどちらの属性もシテが持っていることを示していると思われる。これは同じく前シテが老人である「高砂」のロンギで「今は何をか包むべき。これは高砂住の江の、相生の松の精」（野上編 1984a : 95）とそれまでの人としての属性を残さずに正体を明かしていることと比較すると、「忠霊」では後シテ（忠霊）となっても完全に人から離れた存在にはならず、人と地続きの戦死者で、かつ靖国神社の神でもあることが分かる。一方で、その後のシテ謡の「白真弓。絃をはなれて飛ぶ空の。弥猛の心靖国の」という箇所では、忠霊塔で祀られる忠霊もその魂の本来の居場所は靖国神社であるという靖国神社中心的な観念が窺える。

以上、シテに注目すると、当時の日本国民の多くが忠霊顕彰の当事者として作品を観ることができるよう普遍的なシテ像が設定され、そのある意味で没個性的な戦死者像は靖国神社で祀られる集団的な祭神と親和的であることが明らかになった。さらに詞章中の表現からは、他の初番目物の作品と比べて後シテ（忠霊）となって以降も人と神両方の属性を保持しており、その靈魂のありかについては靖国神社を中心とする表現になっていた。

#### 4-4. 能「忠霊」における忠霊塔の性格に関する記述

「忠霊」の詞章に忠霊塔や忠霊塔建設運動はどのように表れているのか。これまでも構成やシテの表現を通して関連する点を見てきたが、ここでは特に『忠霊塔物語』の分析を通して述べた忠霊塔建設運動の意義や忠霊塔の性格が本作でどのように表現されているかに注目していきたい。

はじめに忠霊塔の性格に関わる記述を見ていく。端的に言えば『忠霊塔物語』においては、忠霊塔への納骨と住民の共同の責任による管理の2点が特に重視されていたが、「忠霊」では、後者に関連する記述は見られるものの、遺骨など戦死者の形見を納めることを明示的に表す記述は見られなかった。まず記述が見られた共同の管理については、前シテが登場する場面で、「勤勞奉仕の群

衆の中に。とりわき親子と思しき二人の者。一入殊勝に候」とあり、シテを含む住民が忠霊塔前で奉仕をする様子が表現されている。なお、この場面で前シテの老人は杓という田をならす農耕具を持って登場することから、ここで言う「勤労奉仕」とは忠霊塔の管理にとどまらない銃後国民がすべき「勤労奉仕」の象徴とも考えられる。ただし忠霊塔前という場面設定を考えれば、第一には忠霊塔に対する住民の奉仕が描かれていると解するのが妥当であると考ええる。

続いて2つめの特徴である忠霊塔への納骨についても実は曖昧な表現は見られる。すなわち中入り前の忠霊塔前の場面に「この処に納まる忠霊には。親子もあり兄弟もあり」という記述があり、「納まる」という表現などから暗に納骨を示しているとも考えられるのである。しかし『忠霊塔物語』で懐かしみや親しみを感じさせるような重要な要素として納骨が強調されていたことに比べると、「忠霊」は納骨に対してかなり温度差があるといえる。

このように忠霊塔の特徴については、関係すると見られる箇所はあるものの、曖昧な表現となっている傾向にあり、特に『忠霊塔物語』で強調されていた納骨に関する具体的な記述がない点で、本作における忠霊塔の存在感を希薄なものとしていた。

#### 4-5. 能「忠霊」における忠霊塔建設の意義に関する記述

忠霊塔建設の意義について『忠霊塔物語』においては、①忠霊に対する祭祀を忘れないこと、②忠霊の偉業を伝え子孫の手本とすることの2つが特に語られていたことは先に述べたが、「忠霊」ではどのように扱われているのか。

まず②については忠霊塔前の前半部のシテ謡に「忠霊の遺児たりし人。長じて次の役に命を捧ぐ。その遺児また次の戦ひに、大空に散華す。斯くつぎ〜」に大君の。御楯となれる例あり」など、子孫の戦争動員を促す姿勢が示されている。こうした表現は銃後国民を鼓舞するという制作目的の一つにもかなるものであったといえよう。

続いて①の祭祀の継続については、前半の見せ場であるクセの場面に次のような関連する詞章が見られる。

地：その上、靖国と斎はれて。御代万代に動きなく。諸人、渴仰の徳を得て、祭祀の絶ゆる憂ひなく。無上の。榮に浴したり。今は皆令満足、たゞ有難き極みなり、

シテ：たとへ凱陣するとても、

地：年を送り日を迎へ。五十、百年経るならば、榮枯盛衰の習はし、世の理に洩れ難く。祭祀続かぬ事もあり。死所を得て心つよく。ふみて、進まん道の上に。我が足跡を残さん。

ここでは、遺骨等が故郷に帰還しても祭祀が途絶えることがある中で靖国の神として祀られ続けることの感謝と、そのようにして死後の祭祀が保障されることで安心して命を捧げられるという思想が謳われている。これはクセの前の場面でワキが発した「花と散りにし忠霊の。御心如何におはすらん」という問いに対するシテの答えであると考えられ、本作でも祭祀の継続が重視されていることが分かる。ただし祭祀の場に関しては必ずしも忠霊塔に限定する表現は見られず、特に「靖国の神と斎はれて」といった表現からは靖国神社を中心とする戦死者祭祀を尊重する姿勢が見られる。

この祭祀の場については、官幣大社大和神社宮司の村岡力が「忠霊」の感想に寄せて、「忠霊塔と靖国神社とは似て非なるものであるよりも非にして似て居る。忠霊塔や忠魂碑の前で招魂祭や慰霊祭を行はれる事もあるのだから之れでは同じやうなものが重複して気分がピッタリ来ない」（村岡 1941：4）と述べている。この発言からは、国家的祭祀は靖国神社で行うとした神社界との合意以降も、忠霊塔における祭祀の執行自体は容認されている以上、神社で行われる祭祀と似たようなことが忠霊塔でも行われていた実情が窺えよう。なお、忠霊塔における祭祀については神仏どちらの様式で行うかという問題もあったことは先述したが、この点、「忠霊」においては制作方針に「僧協を用ゐざる事」（三室戸 1942：34）を定めていることから、仏教による供養の要素を除いて祭祀の様式に関する問題を表面化させないようなワキが設定されているものと推察される。

このように本作では祭祀継続の重要性が表現されつつも、祭祀の場やその方法については曖昧な表現に終始していた。これには元来抽象度の高い能楽の特性も関係していると思われるが、祭祀の問題等が未だ燻っていた中で神社界側へ配慮する形で配役や表現が練られたものと考えられる。

#### 4-6. 能「忠霊」の評価

##### (1) 能楽と日本精神

これまで「忠霊」を忠霊塔建設運動の中で捉えてその内容を見てきたが、このように忠霊顕彰の思想が盛り込まれた新作能はどのような評価を受けていたのだろうか。「忠霊」に触れた人々がどのような感想を抱いたのかということは「忠霊」や当時の能楽の社会的意義を知る上でも重要でもあると考える。

具体的に感想を見る前に、そもそも本作は当時どのような層の人々に享受されていたのかという点を押えておきたい。昭和初期から能楽に触れる層が知識人階級にまで広まっていたことは先に述べたが、「忠霊」は作品の特性から傷痍軍人を含む軍関係者や戦死者の遺族を念頭に置いた公演の機会が多くあった。例えば兵士に対する公演でいえば、1942年10月8日から9日にかけて北京中南海公園懷仁堂で行われた「皇軍慰問演能大会」における披露など、外地の兵士達に披露される例もあった（佐藤 2017：5）。また遺族向けの公演に関して早い例では1941年12月12日から13日にかけて行われた京都観世会主催の「軍人遺族招待会」が行われ（佐藤 2017：5）、他に確認できているだけでも終戦までに4回同様の演能が催されている<sup>11</sup>。しかしながら、当時の雑誌や新聞記事などにそうした兵士や遺族の感想が掲載されることは殆ど無く、表だって扱われるのは忠霊顕彰会関係者や軍関係者の中でもある程度の地位にある人物、あるいは能楽に一家言ある知識人が主である。そのため一般の兵士や遺族等、忠霊顕彰の当事者にどのように受け止められていたのかという点を明らかにするこ

---

11 1942年5月31日「出征軍人遺家族招待能楽会」於岡山後樂園能舞台（佐藤 2017：5）、同年7月8日「遺族慰安会」2回 於西町舞台（沼編 1960：261）、同年10月31日「軍人遺族慰安能楽」於伏見御香宮神社（町田 1942：52）。

とは難しいものの、戦中から戦後にかけての能楽雑誌に掲載された「忠霊」に対する感想を主な資料として特徴的なものを考察していきたい。

「忠霊」について様々な感想が述べられている中でも、当時「忠霊」や能楽自体が社会からどのように受け止められていたのかを示すと言葉として「日本精神」という言葉が比較的多く見受けられる。例えば、雑誌『観世』1942年1月号の「忠霊」の特集記事に掲載された前年11月11日の華族会館での公演に関する諸家の感想に次のような発言が見られる。（以下、下線筆者）

- 能楽二百番悉く日本精神の発露であります、現代の思想を体得して此の能を新作せられた事は思想善導の立場から、敬服の至りであります〔子爵 貴族院議員 大河内輝耕〕（大河内 1942：25）
- 全曲を通じて、謡に型に、現下の時局を認識せしめ、日本精神を発揚せんとの作者の意図も十分に表現せられ、少しの嫌味もなく、「能」の真価を発揮し得た点は、誠に敬服に値するものである〔実業家 馬越恭一〕（馬越 1942：28）

この他、同記事に掲載された同様の感想として、「聴く者をして日本人たるの自覚を促し感奮興起せしめずには措かぬものがある」〔軍事保護院総裁 本庄繁〕（本庄 1942：30）といったものもあり、作品の具体的な内容以前に日本（人）的なものを体現するものとして捉える向きがあったようである。

ところで、この些か抽象的な言葉である「日本精神」とはどのようなものなのか。この言葉は戦前から政府による思想統制の文脈で度々登場し、例えば1934年に文部省に設置された思想局は思想問題への対策として日本精神に基づく教育と学問及文化の建設を示した上で（荻野 2007:126）、「日本精神」を「忠孝の道」と解釈していた（荻野 2007：128）。

こうした中で能楽や謡曲も「日本精神」を表すものとして度々取り上げられるようになっていた。例えば文部省思想局の編集で刊行された『日本精神叢書』

というシリーズのうち、1936年に出版された「謡曲と日本精神」を扱った巻では「日本精神の最も著しいものを、謡曲のすべての詞章から見出し得ると信ずる」と述べられている（文部省思想局編 1936：17）。この能楽に見られる「日本精神」については、より具体的には「敬神尊皇愛国」を表すものと考えられていたようである。文部省訓令で創設された日本諸学振興委員会により1936年11月に開催された講演会において大阪府女子専門学校長平林治徳は、「敬神尊皇愛国」を「日本文学史上、これ程強く、これ程豊富にこの思想を盛つてゐるものは他に類例が少い」と力説し、その根拠として初番目物の存在を挙げている（文部省教学局編 1941：301）。このように能楽は「忠孝の道」と解釈される「日本精神」の文脈に当てはめやすいものであったのである。

以上のような能楽と「日本精神」の関係を踏まえて「忠霊」に立ち返ると、初番目物の形式や天皇・皇族の和歌を盛り込んだ本作は「敬神尊皇愛国」の精神をかなりはっきり示していることが分かる<sup>12</sup>。また、「忠霊」ではそうした能楽がもとから持つとされていた要素に加え、天皇や日本への忠義のために亡くなった忠霊がシテという点でも「忠孝の道」たる「日本精神」の体现であると考えられていたと思われる。先に引用した『日本精神叢書』の「謡曲と日本精神」を扱った巻は、1944年に全川崎産業報国連盟により加筆の上、再版されているのであるが、その際「忠霊」に関する記述も追加され、「一旦緩急あらば醜の御楯となつて身命を祖国に捧げる、所謂七生報国、滅私奉公の精神を鼓吹したもの」として紹介されているのである（文部省教学局編 1944：9）。このように戦前・戦中の「日本精神」という言葉は、単に日本に古来から続く優れた精神性といった抽象的なものにとどまらず国の為に命を捧げさせるような愛国心・忠誠心と密接に結びつくものであった。そうした中で能楽が単なる古典芸術ではなく日本精神を体现するものとして当時一つの位置を得ていたことが「忠霊」に纏わる言説から読み取れるのである。

---

12 「忠霊」には、「あさみどり 澄みわたりたる大空の 広きをおのが心とものがな」（明治天皇作）、「大神に 告げ奉るわが心 御国のために 命ささげむ」（北白川宮永久王作）などの和歌が詞章に盛り込まれている

## (2) 能「忠霊」の戦後

終戦時、能楽界も類に漏れず大きな被害を受けていた。多くの能楽堂が消失した上、今後の能楽を担うべき若い能楽師達も複数戦死した（宮本編 2017：339－342）。その一方で復興への動きも早く、1945年9月16日には染井能楽堂で能楽協会第一回定例会能を行っており、戦後能楽は文化国家日本の古典として新たな位置を得ていくことになったという（佐藤 2017：147）。こうして戦後能楽が新たな歩みを進める中で「忠霊」はどのように扱われたのだろうか。

戦後の芸能に関わる動きでいえば、同じ古典芸能である歌舞伎がGHQにより上演演目の規制を受ける動きが見られたが、能楽に関してはGHQによる規制が表面化することはなかったとされている（佐藤 2017：147）。こうした状況から、「忠霊」についてもGHQから積極的に禁止された可能性は低かったと推察されるが、結局戦後に「忠霊」が正式に上演されたという記録は未だ見られず、再演は殆ど無かったものと思われる。「忠霊」の初演でシテをつとめた観世鍔之丞は戦後、その上演をひどく気にし、起居にも世間をはばかりの風が見えたという（今井 1980：52）。「忠霊」制作の発端となった城戸久平が本作を古典芸術の形式に新しい生命を吹き込む芸術的な試みと捉えていたことは前述した。確かに、戦中の「忠霊」に関する感想の中にも本作を新しい試みをした新作品として評価するものも見られ、一つの芸術・芸能作品として評価され得る作品であったと考えられる。しかしながら、伝えられているこの観世鍔之丞の様子からは、戦後に至っても本作をただの芸術・芸能作品として扱うにはその内容に盛り込まれた軍国主義思想に鑑みて無理があったことが理解できる。

一方で、「忠霊」を再演しようという動きも確かに存在していた。『観世』1971年10月号に「『忠霊』再度上演の計画進む」と題して、「大日本忠霊顕彰会の後身財団法人日本英霊奉讃会（会長小林正一氏・東京都台東区上野六－九－八）と靖国神社の熱心なる希望により明春、靖国神社能舞台において上演される予定」であると掲載されているのである（筆者不詳 1971：6）。しかしながら、記事によれば翌1972年の春に上演される予定となっているものの、観世流による毎月の演能予定が掲載されている『観世』「演能カレンダー」等を調べても

上演の記録は見られず、実際に実現したかは不明である。なお、再演を希望したという日本英霊奉讃会は記事にある通り忠霊顕彰会の後身組織にあたり、1953年に設立された。1975年9月刊『宗務時報』に掲載された本会の紹介によれば、英霊の供養とその遺徳の讃仰を通して日本民族の発展と平和日本の建設をはかることを目的としており、会の使命として英霊奉讃、殉難報国の精神の持ち主の集まりとして戦死者の精神を引きつぎ歩むことを念願しているという（文化庁宗務課編 1975：66）。この紹介からは日本英霊奉讃会では忠霊塔の建設とその維持・祭祀が中心に据えられていた忠霊顕彰会に比べて、忠霊塔に拘らずに戦死者の顕彰一般を主眼としていることが窺える。この日本英霊奉讃会と共に靖国神社も再演を希望したということは、「忠霊」という作品の忠霊塔との関係というよりは、作品に反映された靖国神社と結びつく戦死者慰霊・顕彰の精神が評価され求められたということを示していると考えられる。

## 5. 考察

本稿では、忠霊顕彰会がそれぞれ制作に関わった『忠霊塔物語』と能「忠霊」の2作品を通して様々な慰霊・顕彰の場が併存する中における忠霊塔の立場や意義について論じてきた。これら2作品からは、靖国神社・護国神社との競合の中で独自の性格を確立したかに見えて、実際は靖国神社を中心とする慰霊・顕彰システムに従属的に組み込まれざるを得なかった忠霊塔の姿が理解できると考える。

両作品で描かれた忠霊塔の姿を改めて確認すると、まず『忠霊塔物語』においては、戦死者の墓の荒廃を背景に住民の共同の管理によって祭祀を続ける公営の墓として忠霊塔が求められ、それには単に戦死者を悼んでのことに留まらず戦時中において国民の戦争意識を昂揚させる狙いもあったことが明らかになった。そして、他の戦死者慰霊・顕彰の場との関係においては、特に戦死者の靈魂を祀る靖国神社を尊重しつつも、遺骨を納めるという忠霊塔の特徴を、戦死者を身近に感じさせるものとして積極的に強調していた。

一方、能「忠霊」では、『忠霊塔物語』と比較して納骨を伴うといった忠霊



塔の特徴が表現されておらず、祭祀の場に関する表現についても忠霊塔よりも後半の舞台である靖国神社を中心とするものになっていた。また本作では初番目物と二番目物を複合させるような構成や、不特定の戦死者をシテとし、僧侶をワキに用いないことなど従来の能の形式を取捨選択しつつ新たな試みがなされた作品であった。これは、能楽界側から見れば古典芸能の中に新たな形式等を探り入れ、戦時下という状況の中で時代に適応し能楽を保存しようとする動きと捉えられる。その一方、仏教など様々な思想が織り込まれている能楽の中でも特に神社、神道との繋がりを強調する方向でなされているこれらの工夫は、靖国神社中心の戦死者慰霊・顕彰の観念が表現されるに一役買っていると考えられる。

以上、『忠霊塔物語』と「忠霊」における忠霊塔に関連する表現を比較すると、忠霊塔について2つの側面が見えてくると考えられる。すなわち、戦死者の慰霊・顕彰に関する様々な場が併存する中、死者に対する親しみが感じられる公営の墓として独自性が強調された忠霊塔の側面と、一方で戦死者の靈魂を祀る靖国神社・護国神社が慰霊・顕彰の中心であり忠霊塔はそれに従属的なものに過ぎないとする側面が見られ、それぞれ前者は『忠霊塔物語』、後者は「忠霊」に特に表れている。この忠霊塔に関する2側面は、もとをたどれば1939年に神社界との間で交わされた忠霊塔の性格等についての合意に端を発するものと考えられる。この合意で靖国神社・護国神社との棲み分けがなされたことは、一面ではこれまで述べたような忠霊塔の意義や性格を確立するものであったが、他方で忠霊塔が独立して戦死者を祀る場から、“靖国神社で祀られる忠霊（英霊）の遺骨”を祀る場として靖国神社中心の慰霊・顕彰システムに従属することが確認されたとも言えるからである。なお、この合意以降、神社界も忠霊顕彰運動に対する全面的な支持を表明し、忠霊顕彰会の発足当初は役員でなかった靖国神社宮司は1941年2月時点で顧問となるなど（菱刈 1941 e）、忠霊顕彰会が靖国神社を尊重する必要性はますます高まっていったことが推察される。「忠霊」に見られる靖国神社中心の観念はこのような忠霊塔を主体とする戦死者慰霊・顕彰の限界を示していると考えられるのである。

## 6. おわりに

最後に『忠霊塔物語』が刊行された1942年以降の忠霊塔の動きを簡単に述べておきたい。

忠霊塔は1942年後半のガダルカナル島戦を期に厳しい経過をたどることになる。横山篤夫（2008：105－106）によれば、死者2万人を超える悲惨な敗戦となったガダルカナル島戦以降敗戦が続き戦死者の遺骨の送還が困難な状況になり、実質、納骨施設としての忠霊塔の意義は失われたという。また、以前から懸念されていた資材不足もますます深刻化し、多くの市町村で忠霊塔の建設が頓挫することになった。さらに戦後になると、忠霊塔をはじめとする軍国主義的な記念碑等はGHQの指示により排除の対象となり、1946年11月1日付で、忠霊塔や忠魂碑建設の禁止（建設中のものは中止）、学校や公共用地にあるものは撤去を命ずる通牒が出されることとなった（本康 2003：520）。こうした厳しい経緯もあってか、戦死者の妻達に対して戦後に行われた調査では、死者を身近に感じる対象として遺影や仏壇を挙げるケースが多く、靖国神社・護国神社を挙げる者も一定数いた一方で、忠霊塔を挙げた者はかなり少数であったことが報告されている（横山 2008：125）。遺族の反応は地域や個人によって様々であると考えられるが、家や個人単位での慰霊が最も親しく、納骨も困難になっていた忠霊塔にそれを見いだすのは難しかったことが分かる。以上の動きからは、国民の戦争動員という意図のもと靖国神社に祀られる戦死者の遺骨を祀る場として建設が進められた忠霊塔の危うさが、戦況の悪化と敗戦を経験して忠霊塔の存在を揺るがしていたといえよう。

その一方で、講和条約発効によってGHQによる規制が緩和された1955年前後、戦死者の慰霊に関わる碑の建設ブームが生じ、その中で忠霊塔と呼ばれる碑も再建・建設される動きがあった（『朝日新聞』1999.7. 25朝刊）。しかし戦後75年以上を経た現在、忠霊塔を管理する遺族会等の高齢化によって忠霊塔の存続が危ぶまれる例も多く、こうした現状は日清・日露戦死者の墓の荒廃により忠霊塔建設が求められた1930年代の状況と類似しているともいえる。本稿で見てきたように戦争動員の一手段として推進され、靖国神社・護国神社と競合

する中でその性格等が揺らいだ忠霊塔であったが、忠霊塔の根本にあるといえる戦死者の祭祀を続けていくということは戦争の記憶を後世に伝えるという意義も加わって今ますます重要性を増しているのではないだろうか。このことを念頭に今後も忠霊塔の動きについて注視していきたい。

## 謝辞

この論文を執筆するにあたり様々ご指導や助言を下さいました木村敏明教授、高橋原教授、谷山洋三教授、大村哲夫准教授、阿部友紀助教、故山田仁史准教授、宗教学研究室室員の皆様、また資料の閲覧や取得に協力して下さいました東北大学図書館職員の皆様に心より御礼申し上げます。

## 参考・引用文献

- 飯塚恵理人,2007,「メディアと能楽——SPレコードと朝日新聞社主催能を中心に」『梶山国文学』(31):21-33.
- 今井昭彦,2008,「忠霊塔建設に関する考察——その敗戦までの経緯」『国立歴史民俗博物館研究報告』147:375-416.
- 今井欣三郎,1980,「能・狂言 「忠霊」 能の盛行時代」『芸能』22(7)(257):52.
- 馬越恭一,1942,「新作能「忠霊」を見て」『観世』13(1)(135):28-29.
- 梅若万三郎,1944,「謡曲講座——忠霊 謡ひ方」『観世』15(3):28-29.
- 大河内輝耕,1942,「日本精神を発露するもの」『観世』13(1)(135):25-26.
- 大原康男,1983 a,「忠魂碑の研究——その成立の経緯と社会的機能をめぐって」『國學院大學日本文化研究所紀要』51:188-245.
- ,1983 b,「続・忠魂碑の研究——護国神社制度の成立と忠霊塔建設運動に焦点をあてて」『國學院大學日本文化研究所紀要』52:47-104.
- 荻野富士夫,2007,『戦前文部省の治安機能:「思想統制」から「教学錬成」へ』校倉書房.
- 観世鏡之丞,1941,「新作能忠霊に就いて」『観世』12(11)(133):2-3.

- 城戸久平,1964,「現代の「面」」『芸術新潮』15(1):123-125.
- 小林責/西哲生/羽田昶,2012,『能楽大事典』筑摩書房.
- 佐藤和道,2017,「戦時下の能楽——『忠霊』『皇軍艦』を中心に」『演劇論集 日本演劇学会紀要』65(0):1-17.
- 茂山(善竹)忠亮,2018,「阪神能楽組合に見る能楽界の変革と戦時体制——狂言方茂山久治の活動を中心に」『Core Ethics: コア・エシックス』(14): 59-69.
- 田中充,1990,『未刊謡曲集 続九』古典文庫.
- ,1995,『未刊謡曲集 続十六』古典文庫.
- 富山隆広,2021,「戦時中新作能〈忠霊〉の展開」『楽劇学』(28):41-61.
- 日外アソシエーツ編,2004,『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ.
- 沼艸雨編,1960,『観世華雪芸談』松書店.
- 野上豊一郎編,1984 a,『謡曲全集 卷一』中央公論社.
- 編,1984 b,『謡曲全集 卷二』中央公論社.
- 東谷櫻子,2018,「新作能「忠霊」をめぐる考察」『花もよ』(38):14-17.
- 菱刈隆,1939 a,「財団法人大日本忠霊顕彰会役員名簿」, J A C A R Ref. B 04012331200, 本邦記念物関係雑件/忠霊顕彰会関係 第一卷 (I-1-7-0-3\_6\_001), 外務省外交史料館
- ,1939 b,「昭和十五年度第二回 財団法人大日本忠霊顕彰会評議員会議事録」, J A C A R Ref. B 04012331200, 本邦記念物関係雑件/忠霊顕彰会関係 第一卷 (I-1-7-0-3\_6\_001), 外務省外交史料館
- ,1939 c,「財団法人大日本忠霊顕彰会日誌抜萃」, J A C A R Ref. B 04012331200, 本邦記念物関係雑件/忠霊顕彰会関係 第一卷 (I-1-7-0-3\_6\_001), 外務省外交史料館
- ,1941 a,「財団法人大日本忠霊顕彰会寄附行為」, J A C A R Ref. B 04012331300, 本邦記念物関係雑件/忠霊顕彰会関係 第一卷 (I-1-7-0-3\_6\_001), 外務省外交史料館
- ,1941 b,「財団法人大日本忠霊顕彰会会報 顕忠」, J A C A R Ref.

- B04012331300, 本邦記念物関係雑件／忠霊顕彰会関係 第一卷 (I-1-7-0-3\_6\_001), 外務省外交史料館
- , 1941 c, 「第四 大日本忠霊顕彰会事業概況」, J A C A R Ref. B04012331300, 本邦記念物関係雑件／忠霊顕彰会関係 第一卷 (I-1-7-0-3\_6\_001), 外務省外交史料館
- , 1941 d, 「第五 大日本忠霊顕彰会日誌抜萃 (自昭和15年4月以降)」, J A C A R Ref. B04012331300, 本邦記念物関係雑件／忠霊顕彰会関係 第一卷 (I-1-7-0-3\_6\_001), 外務省外交史料館
- , 1941 e, 「財団法人大日本忠霊顕彰会役員名簿 (昭和十六年六月二十日)」, J A C A R Ref. B04012331300, 本邦記念物関係雑件／忠霊顕彰会関係 第一卷 (I-1-7-0-3\_6\_001), 外務省外交史料館
- , 1942 a, 『忠霊塔物語』 童話春秋社.
- , 1942 b, 「忠霊精神の発露」『観世』 13(1)(135) : 20-21.
- 文化庁宗務課編, 1975, 「宗教関係民法法人めぐり (15) 29財団法人日本英霊奉讃会」『宗務時報』 (35) : 65-66
- 本庄繁, 1942, 「伝統芸能の魅力」『観世』 13(1)(135) : 30.
- 町田三葉, 1942, 「軍人遺族慰安能楽 (京都)」『観世』 13(12)(146) : 52.
- 三室戸敬光, 1940, 「紀元二千六百年の記念能に就て」『観世』 11(2)(112) : 7-8.
- , 1942, 「新曲「忠霊」について」『観世』 13(1)(135) : 34-36.
- 宮本圭造編, 2017, 『近代日本と能楽』 野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」.
- 村岡力, 1941, 「新曲能楽 忠霊を観て(二)——附り 新作能楽の今昔」『皇国時報』 (800) : 4-5.
- 村上重良, 1974, 『慰霊と招魂』 岩波書店.
- 本康宏史, 2003, 「慰霊のモニュメントと「銃後」社会——石川県における忠霊塔建設運動 (慰霊と墓—— [共同研究] 近代兵士の実像 (2))」『国立歴史民俗博物館研究報告』 102 : 515-549.
- 文部省教学局編, 1941, 『日本諸学振興委員会研究報告. 第三篇 (国語国文学)』

内閣印刷局.

——編,1944,『謡曲と日本精神』全川崎産業報国連盟.

文部省思想局編,1936,『日本精神叢書. 第2』日本文化協会.

横山篤夫,2008,「戦没者の遺骨と陸軍墓地——夫が戦没した妻たちの六〇年後の意識から(戦争体験の記録と語りに関する資料論的研究)」『国立歴史民俗博物館研究報告』147:93-131.

筆者不詳,1939,「忠霊塔問題について 公営墳墓の意義確定 対神社関係も鮮明」『皇国時報』(725):1.

——,1942 a,「関西に於ける能楽の今昔——座談会」『謡曲界』54(3):65-79.

——,1942 b,「忠霊演能写真——(試演より発表まで)」『観世』13(1)(135):18.

——,1971,「「忠霊」再度上演の計画進む」『観世』38(10):6.

## 参考ウェブページ

国立公文書館アジア歴史資料センター,「詳細情報 本邦記念物関係雑件／忠霊顕彰会関係 第一巻 2. 大日本忠霊表彰会ニ関スル件(1)本邦ニ於ケル忠霊表会 分割 1 (B04012331200)」, (2021年12月20日取得, [https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB\\_ID=G0000101EXTERNAL&DEF\\_XSL=reference&ON\\_LYD=on&IS\\_INTERNAL=false&IS\\_STYLE=default&IS\\_KIND=detail&IS\\_START= 1 &IS\\_NUMBER= 1 &IS\\_TAG\\_S18=eadid&IS\\_KEY\\_S18=M2006092117022458249](https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=reference&ON_LYD=on&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KIND=detail&IS_START= 1 &IS_NUMBER= 1 &IS_TAG_S18=eadid&IS_KEY_S18=M2006092117022458249))

——,「詳細情報 本邦記念物関係雑件／忠霊顕彰会関係 第一巻 2. 大日本忠霊表彰会ニ関スル件(1) 本邦ニ於ケル忠霊表会 分割 1 (B04012331300)」, (2021年12月20日取得, [https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB\\_ID=G0000101EXTERNAL&DEF\\_XSL=reference&ON\\_LYD=on&IS\\_INTERNAL=false&IS\\_STYLE=default&IS\\_KIND=detail&IS\\_START= 1 &IS\\_NUMBER= 1 &IS\\_](https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/result?DB_ID=G0000101EXTERNAL&DEF_XSL=reference&ON_LYD=on&IS_INTERNAL=false&IS_STYLE=default&IS_KIND=detail&IS_START= 1 &IS_NUMBER= 1 &IS_)

TAG\_S18=eadid&IS\_KEY\_S18=M2006092117022458250)

# Unfinished Movement for the Consoling and Honoring of the War Dead: Focusing on “The Story of Chureitou” and The Noh Play “Churei”

Miyu Okamoto

From Meiji Period to pre-war Showa Period, a lot of institutions to console and honor the war dead had been built. In this paper I will focus on the monument called chureitou which was promoted construction by ‘Japan Honoring Association’ (財団法人大日本忠霊顕彰会), and consider its situation among such institutions in the war through researching promotional works, namely the book “The Story of Chureitou” and the noh play “Churei”.

“The Story of Chureitou” written by the chairman of the association was published in 1942. In this book, the significance to build and sustain chureitou publicly was emphasized, and its role as a charnel was focused on to especially differentiate it from Yasukuni Jinja.

On the other hand, in “Churei”, although it was requested to produce by ‘Japan Honoring Association’, such significance of chureitou was hardly specified. The play was first staged at Yasukuni Jinja in 1941. Its architecture and characters matched to the view of the war dead, that is to be God in Yasukuni Jinja.

The results indicate the two sides of chureitou. The significance and feature of chureitou were established through competition with other memorial institutions. However, at the same time, it had to be dependent on Yasukuni Jinja to coexist with it.